



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 13 号 / Boletín Núm. 13

2008 年 9 月 22 日 / 22 de septiembre de 2008

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
ア-バン大塚 3F (株) ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel: 03-5907-3750 Fax: 03-5907-6364
e-mail: g004esp.mng@galileo.co.jp
ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/ajh/>

編集部

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部スペイン語部会
竹村文彦研究室 Tel: 03-5454-6437
e-mail: takemura@ask.c.u-tokyo.ac.jp

巻頭言——忘れる前に

桑名 一博 (日本イスパニヤ学会元会長)

すでに学会をしりぞき、公的な活動から身を引いている者にとって、学会の会報に巻頭言を書くというのはいささか荷が重すぎる。そこで、百年を越えたスペイン語教育の歴史を振り返り、あるいは興味をひくかも知れないと思われる落ち穂を拾うことで責を果たしたい。

日本の学校でスペイン語が教えられるようになったのは 19 世紀の終わりからである。上田敏のような例外はあるにしろ、当時の学習者の関心は主としてフィリピンに向けられていたようで、なかには、スペイン語を身につけたらフィリピンに渡り、スペインからの独立運動に参加しようと考えていた者もいたという。創設期の東京外語では、米西戦争の結果フィリピンが実質上アメリカの統治下に入るのがわかると、もはやスペイン語を学ぶ意味なしと、半数以上の学生が退学してしまった学年があったと聞く。

その後、学習者の関心は中南米に移り、新大陸に渡って一旗あげるため、あるいは外交、通商の分野で活躍するためにこの言葉を学ぶ、というのが 20 世紀半ばまでの一般的な流れであった。専攻の学科をもつ学校は東京、大阪、天理の外国語学校だけで、第二語学としてスペイン語を教える所も拓大や幾つかの高等商業学校に限られていた。したがって学習者の総数も、せいぜい数百人といったところだったろう。

こうした時代にイスパニヤ学研究の種をまいた人としては、東京外語の第三代外国人教師としてやってきた Gonzalo Jiménez de la Espada (通称エスパダさん) があげられる。同氏と永田寛定氏との幸福な出会いが、日本におけるスペイン文学研究の基礎を作ったと言っても過言ではない。この点に関しては永田先生自身の「来日したイスパニア語の教師たち 1」(月刊「スペイン語」1969, 1)に譲るとして、98 年の世代の作家たちと同世代の人であった氏の思想的な背景を暗示するものとして、日本から帰国された先生ご一家がしばらく「学生館」<La Residencia de Estudiantes>に住んでおられたこと、外務省留学生としてスペインへやってきた昔の教え子に下宿の紹介を頼まれたとき、「自由教育学院」<La Institución Libre de Enseñanza>と関係のある塾の先生の家を紹介してい

ることなどをあげておこう。そのお陰で後に神奈川県知事となる内山岩太郎氏は、二年間にわたって「自由教育学院」で学ぶという貴重な経験をしている。

しかし最も注目されるのは、氏がご自分の後任の人選を「歴史研究センター」<Centro de Estudios Históricos>のアメリコ・カストロ (Américo Castro) に依頼していることかもしれない。カストロは当時 30 代半ばで、マイヤー・リュブケの『ロマンス語言語学 研究入門』の翻訳とそれにつけた詳細な注で注目を浴びた文献学者だが、研究の軸足を語学研究から文学研究へと移していた気鋭の学者だった。

ムニョス (José Muñoz Peñalver)、ピサロ (Miguel Pizarro Zambrano)、アルバレス (José Luis Alvarez -Taladriz) といった戦前の日本にやってきた外国人教師は、いずれもなんらかの形でカストロの推薦をうけているが、この三先生をよく知る水谷清氏は「常に思うことは、スペインは実に良い先生を日本に送ってくれたということである。恩師ムニョス先生は言うにおよばず、天才的学者のピサロ先生、それに次ぐアルバレス先生、これはイスパニヤ語を学ぶ者の幸福と言えよう。恐らくこの三人はスペイン本国においても粒選りの人物であろう」(<Más y Menos> No. XVII, 1957) と述べている。

とは言うものの、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの友人であったムニョス先生や、学生館でロルカやブニユエルと暮らしていたピサロ先生が伝えようとしたものは学生たちに受け入れられただろうか。98 年の世代の作家たちならともかく、後の 27 年の詩人たちへとつながる前衛文学の流れは、当時のスペイン語学習者の理解を越えたものだったろう。両先生の来日当時の教え子たちの思い出などを読むと、あまりにも違う文化的素養の差を前にして、怖れのようなものを感じていたのがわかる。

ムニョス先生は同僚の先生や学生たちに敬愛されていたが、日本に来てから一番親しく付き合ったのは、来日前にスペインで知り合ったと思われる堀口大學かもしれない。詩人が先生の葬儀の時に花を贈っているのを見ると、その交友は生涯にわたるものだったのがわかる。先生の唯一の出版物である<Tanka>では堀口大學の作品がスペイン語に訳されており、堀口大學のほうも若い頃にルベン・ダリーオについて書き、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの「乳房抄」をフランス語から訳し、死を前にして「ドン・キホーテ」後編の完訳を願っていた。

また、ロルカから flecha sin blanco [標的のない矢] とうたわれ、その自由奔放な生き方を羨ましがられていたピサロ先生は、漢字の署名から察すると、大阪の学生たちからは親しみをこめて PI=KO (P 公?) と呼ばれていたらしい [清水憲男説]。ロルカの言葉に氣にかけていた先生は晩年になって、強度の情緒不安に苦しめられたようだが、blanco を詩と見定められたらしく、死後に残された作品は<Poesía y teatro>としてまとめられている。

スペインが第二共和制となったとき、政府は積極的に文化人を外交官に登用し、カストロも駐ドイツ大使となったが、駐日臨時公使の役はムニョス先生が固辞されたため、アルバレス先生がつとめることになった。ピサロ先生はその前に、ルーマニアを経て合衆国駐在の領事となっていた。そのためフランコ政権が確立すると、カストロとその弟子たちはいずれも亡命者的な存在となった。ファランヘ党員からなる経済使節団が東京外語を表敬訪問したとき、出迎えた人たちのなかにムニョス先生の姿を見た駐日公使が校内に入るのを拒み、ひと悶着あったという。

1950 年代に入ると、スペイン語の学習者が急増したうえスペイン語圏の文化に対する関心も高まり、スペイン語をめぐる状況は以前と一変する。こうした変化を前にして、大学

書林からスペイン語の学習雑誌である「月刊スペイン語」が創刊されたが、スペイン語のわかる編集者がいないということで、定時制の高校で英語を教えたり商社の嘱託をしていたわたしが急遽、編集の任にあたることになった。その当時は語学関係はともかく、その他の分野にはまだ専門家が育っていなかったので、執筆者をさがすのはかなり苦労した。しかしその反面、後に駐チリ大使を務めた色摩力氏が奥山恭の名でホセ・セラについて書いたり、新進の独文学者であった川村二郎氏がボルヘスを扱うなど、かなり珍しい記事を載せることができた。

NHK の国際局にいたフワン・ゴイティソロの義弟に会って原稿を依頼したのもその頃である。雑誌を見せながら編集方針を説明していると、どうして日本人がラモン・センデルやアメリコ・カストロを知っているのかと、ひどく驚いた様子で訊くので、こちらの方がかえってビックリしたのを覚えている。それから彼は、ゴイティソロがカストロと文通を始めたとき、どんなに細心の注意を払ったかを語ってくれたが、それはまるで地下工作の計画打ち合わせをしている感じで、当時のフランコ政権の検閲の厳しさを垣間見せてくれた。

10 年ほど前に書簡集 < *El epistolario (1968-1972) : Cartas de Américo Castro a Juan Goytisolo* > 1997 が出版され、二人の文通がカストロの死まで続いていたのを知った。亡命者として外からスペインを眺めることを余儀なくされたカストロは、戦後、スペイン史の構造を透視する歴史家に変貌していたが、その中心をなすキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒の共存と葛藤という史観が、ゴイティソロに大きな影響を与えていることは言うまでもない。

それはそれとして、オルテガがフランコのスペインに帰ったことを厳しく批判していたムニョス先生は、病妻を抱えての尊敬するカストロ先生の帰国を、いったいどのような気持ちで受け止められたのだろうか、と、書簡集を読みながらふと思った。

2007 年度 日本イスパニヤ学会 第 53 回大会

期日：2007 年 10 月 27 日（土）・28 日（日）

会場：清泉女子大学 本館・2 号館・ラファエラホール食堂・講堂ロビー
〒141-8642 東京都品川区東五反田 3 丁目 16 番 21 号

受付：講堂ロビー 休憩室：2 号館 2 F 232 教室 書籍展示：221 教室

実行委員長：吉田彩子

10 月 27 日（土）

11：00～13：00 理事会（本館 2 F 大会議室）

13：30～13：40 大会挨拶（2 号館 4 F 240 教室）

日本イスパニヤ学会会長 高橋覚二

清泉女子大学学長 岡野治子

13：40～14：40 総会（2 号館 4 F 240 教室）

15：00～17：45 研究発表（詳細は研究発表プログラムに記載）

18：00～20：00 懇親会（ラファエラホール食堂）

10 月 28 日（日）

9 : 30 ~ 12 : 45 研究発表 (詳細は研究発表プログラムに記載)

研究発表プログラム

10月27日(土)

SESSION A (15 : 00 ~ 16 : 30)

A-1 : スペイン語教育 (Enseñanza de la lengua española)

: 2号館 2 F 222 教室

司会 < 西川喬 (神戸市外国語大学) >

- (1) 寺田裕子 (慶應義塾大学)

「DELE と CEFR (ヨーロッパ言語共通枠組み) に準拠したスペイン語履修コースの試案」

- (2) ナカガワ マルガリータ (大阪大学)

「冠詞を導入するための教材の提案」

- (3) 斎藤文子 (東京大学)

「スペイン語授業支援のためのオンライン・アーカイブの開発」

A-2 : 言語 (Lingüística Hispánica) : 2号館 3 F 231 教室

司会 < 三好準之助 (京都産業大学) >

- (1) 高澤美由紀 (早稲田大学)

「話者の感情が込められた発話におけるイントネーション型の傾向について」

- (2) 泉水浩隆 [研究代表者]、木村琢也、高澤美由紀、豊丸敦子

(早稲田大学、清泉女子大学、早稲田大学、共立薬科大学)

「HLH*音調と文の種類の知覚に関する実験音声学的研究」

- (3) 川口正通 (大阪大学大学院)

「y eso que によって導かれる譲歩節について」

A-3 : 文学 (Literatura Hispánica) : 2号館 3 F 230 教室

司会 < 田尻陽一 (関西外国語大学) >

- (1) Santiago ESPARZA CELORRIO (関西外国語大学)

“Los escritores españoles en la obra narrativa de Sabine R. Ulibarri”

- (2) Sandra DELGADO MERRILL (University of Central Missouri)

“Las epifanías en la minificción de Rogelio Guedea”

- (3) 福岡典子 (清泉女子大学大学院)

「アントニオ・ムニョス＝モリーナ El jinete polaco の時間—『失われた時を求めて』の時間との比較を通して—」

SESSION B (16 : 45 ~ 17 : 45)

B-1 : 言語 (Lingüística Hispánica) : 2号館 3 F 231 教室

司会 < 山崎信三 (立命館大学) >

- (1) 三好準之助 (京都産業大学)

「多義語『目』と ‘ojo’ の日西対照研究」

- (2) 和佐敦子 (大阪外国語大学)

「動詞迂言句 llegar a を前件とする反事実的条件文について」

B-2 : 文学 (Literatura Hispánica) : 2号館 3 F 230 教室

司会 < 柳原孝敦 (東京外国語大学) >

- (1) 大楠栄三 (静岡県立大学)

「語りのモデルへの革新的・実験的な揺さぶりーパルド＝バサン *Insolación* (1889) の書き出しー」

- (2) 今井洋子 (京都産業大学)

「英文学教師 コルタサルと漱石」

10月28日(日)

SESION C (9:30~11:00)

C-1: スペイン語教育 (*Enseñanza de la lengua española*)

: 2号館2F222教室

司会 <大森洋子 (明治学院大学) >

- (1) Juan Carlos MOYANO LÓPEZ (慶應義塾大学)

“Función del profesor nativo y tipos de actividades para la clase de español como segundo idioma en las universidades japonesas”

- (2) 森本栄晴 (早稲田大学)

“Alguna aportación fonética a la enseñanza de la gramática española”

- (3) Gerardo VILLEGAS MUÑOZ (関西外国語大学)

“Un enfoque sociolingüístico del fenómeno *kikokushijo*: análisis de las características de la interlengua de escolares japoneses repatriados de países hispanohablantes”

C-2: 言語 (*Lingüística Hispánica*): 2号館3F231教室

司会 <佐藤邦彦 (立教大学) >

- (1) 田林洋一 (清泉女子大学大学院)

「EN否定の出現条件に関する一考察」

- (2) Francisco José BARRERA RODRÍGUEZ (立命館アジア太平洋大学)

“La continuidad y la especificidad en los juicios de gramaticalidad del artículo español por estudiantes japoneses”

- (3) Ana Isabel GARCÍA (関西外国語大学)

“Artículo indefinido + posesivo + nombre en el español de Guatemala”

C-3: 文学 (*Literatura Hispánica*): 2号館3F230教室

司会 <竹村文彦 (東京大学) >

- (1) 森直香 (京都外国語大学)

「1950年代の新劇とフェデリコ・ガルシア・ロルカの戯曲」

- (2) 岡本淳子 (大阪外国語大学)

「劇作家と歴史叙述ーブエロ・バリエホの『サン・オビーディオの演奏会』の場合」

- (3) 丸田千花子 (放送大学)

「ミゲル・デリーベスの『異端者』(1998)における都市、農村、夫婦」

SESION D (11:15~12:45)

D-1: 文化 (*Cultura Hispánica*): 2号館3F231教室

司会 <清水憲男 (上智大学) >

- (1) Darío GONZALEZ RAMIREZ (桃山学院大学)

“La jarana peruana: institución social plurivalente”

(2) 藤野雅子 (京都産業大学)

『ルカノール伯爵』が伝えるもの」

(3) 花方寿行 (静岡大学)

「Luis Buñuel の *Tristana* —原作および『コレクター』『偽りの花園』との関係において」

D-2 : 文学 (*Literatura Hispánica*) : 2号館 3 F 230 教室

司会 < 稲本健二 (同志社大学) >

(1) 瀧本佳容子 (慶應義塾大学)

「デ・ブルガール『カトリック両王年代記』における演説について」

(2) 田邊まどか (神戸市外国語大学大学院)

「《*Miréme, y lucir vi un sol en mi frente*》: ギンゴラの『ポリフェモ』に映ったポリフェモの古典的要素」

(3) 坂田彩 (清泉女子大学大学院)

「*Coquín* と *Clarín* —道化の二重の役割」

日本イスパニヤ学会 2007 年度総会

2007 年 10 月 27 日 (土)

清泉女子大学 2号館 4 F 240 教室

1. 開会

2. 議長選出

3. 報告

(1) 新入会員の紹介

(2) 第2回奨励賞

(3) 次回大会

(4) その他

4. 議事

(1) 会計報告

(2) 監査報告

(3) 2008 年度予算案

(4) 機関誌 *HISPÁNICA*

(5) その他

5. 閉会

日本イスパニヤ学会 2007 年度第 1 回理事会議事録

2007 年 5 月 20 日(日)13 時～16 時
名古屋ターミナルビル 7 階会議室

出席：稲本健二、片倉充造、佐藤邦彦、清水憲男、杉山晃、高垣敏博、高橋寛二、
竹村文彦、田尻陽一、宮本正美、三好準之助、柳原孝敦、山崎信三
(庶務委員：伊藤ゆかり、前田明美)

欠席：川上茂信、柳沼孝一郎、西川喬（委任状あり）

【審議事項】

1) 議事録承認

2006 年度第 3 回理事会議事録（2006 年 10 月 21 日）、2006 年度総会議事録（同日）、メールによる臨時理事会審議議事録（2006 年度第 3 回理事会後、2007 年 5 月 17 日現在）承認。

2) 会員異動

- ・ 5 人の入会希望者を承認。4 人の退会希望者を了解。

3) 今年度大会（2007 年 10 月 27、28 日開催予定）

- ・ 杉山理事より以下の報告があった。
大会開催案内の発送を 6 月初旬に予定し、発表申込み締め切りを 8 月末日とする。
ゲストスピーカーは検討中。プログラム案を次回理事会に諮る。
- ・ 発表希望者が会費を納めた正式な会員であるかどうかチェックし、発表内容のレジュメを理事会でチェックすることを確認。

4) 機関誌 HISPÁNICA

- ・ 編集委員長の田尻理事より以下の報告があった。
- ・ 第 51 号原稿応募状況：論文計 14 本（言語 6 本、スペイン語教育 2 本、文学 3 本、文化 3 本）の応募があった。直ちに査読に入る。
- ・ 昨年度の日本イスパニヤ学会奨励賞の該当者はナシ。
- ・ 投稿規定の分野に「スペイン語教育」を加えることを承認。
- ・ HP ならびに機関誌に掲載されている投稿規定の和文と西文間の若干の齟齬を修正する。

5) 会報

- ・ 竹村理事より次号（第 12 号）の予定内容の報告。
- ・ 書評の執筆は可能な限り会員に依頼することを確認。

6) その他

- ・ Asociación Internacional de Hispanistas の II Encuentro de Presidentes de Asociaciones Nacionales de Hispanistas へ高橋会長が出席するにあたり、「会長国際学会出張補償費」として 50,000 円を拠出することを承認。
- ・ 地域研究学会連絡協議会に継続して加入することを承認。
- ・ 分野ごとの研究会発足について、次回理事会で検討。
- ・ 5 月 24 日に予定されている日本放送協会と NHK 外国語講座関係 13 学会の会見には、本学会を代表して竹村理事が出席。
- ・ 次回理事会は 9 月 23 日（日）に開催することを決定。

メールによる臨時理事会審議議事録

(2006 年度第 3 回理事会後、2007 年 5 月 17 日現在)

【報告事項】

グラシアン賞の受賞について

- ・ 2006 年 12 月 15 日グラシアン基金事務局より、当学会が 2006 年度バルサタル・グラシアン賞を受賞した旨の連絡を受けた。団体としては初めての受賞。
- ・ 同 12 月 25 日賞金 500,000 円を受領。

【審議事項】

1. 会員異動

- ・ 4 名の退会を承認。
- ・ 消息がつかめず 3 年間会費の支払いも無い会員の扱いについて、次回理事会で検討する。

2. 機関誌 HISPÁNICA について

- ・ 2006 年 12 月 25 日付で第 50 号 600 部を発行、弘学社より発送した。
- ・ 学会シンポジウムのゲストスピーカーの 2 名には、『イスパニカ』2 部と抜き刷り 30 部を、高橋会長名で贈呈。
- ・ シンポジウムの司会者およびパネリストには、『イスパニカ』5 部と抜き刷り 30 部を贈呈。

3. 会報について

- ・ 2007 年 2 月 10 日付で第 11 号 500 部発行、ガリレオより発送。
- ・ 記事の執筆者には 5 部を、また学会シンポジウムのゲストスピーカーには 2 部ずつ贈呈。
- ・ 本号の編集中に長南実会員の訃報が届いた。今号では編集後記で追悼の意を表したが、生前の同会員の貢献を顧みて、次号で追悼文を掲載してはとの提案がなされた。
- ・ 次号で依頼する書評について、本学会会員ではない著者による書籍でも有益であれば取り上げるべきか、また非会員の評者に依頼することもできるかについて、次回理事会で検討。

4. 機関別認証評価に係る専門委員候補者の推薦について

- ・ 2006 年 11 月 17 日、大学評価・学位授与機構から「機関別認証評価に係る専門委員候補者の推薦」について依頼があり、当学会からは、高橋覚二会長、三好準之助副会長、並びに斎藤文子会員（東京大学）を推薦。

5. Asociación Internacional de Hispanistas について

- ・ 2007 年 4 月 11 日付で、同協会より II Encuentro de los Presidentes de Asociaciones Nacionales de Hispanistas への出席要請があった。
- ・ 2004 年の第 1 回大会には堀田前会長が出席しており、今回も高橋会長が出席することを確認。

6. 会計について

日本イスパニヤ学会 2007 年度第 2 回理事会議事録

2007 年 9 月 23 日（日）13 時～16 時
名古屋ターミナルビル 8 階 A2 会議室

出席：稲本健二、片倉充造、佐藤邦彦、杉山晃、高橋寛二、竹村文彦、田尻陽一、西川喬、
宮本正美、三好準之助、柳沼孝一郎、柳原孝敦、山崎信三、吉田彩子（大会実行委
員長）

（庶務委員：伊藤ゆかり、前田明美）

欠席：川上茂信・清水憲男・高垣敏博（委任状あり）

【報告事項】

特になし

【審議事項】

1) 議事録承認

2007 年度第 1 回理事会議事録（2007 年 5 月 20 日）、メールによる臨時理事会審議議
事録（2007 年度第 1 回理事会後、2007 年 9 月 20 日現在）を承認。

2) 今年度（2007 年度）大会について

- ・吉田彩子大会実行委員長の提案に基き、以下のように決定。
—今年度は講演等を省き、多数にのぼる研究発表を重視したプログラムとする。
—研究発表各セッションの司会は理事を中心に担当し、未定の司会は会長から依頼
する。

3) 機関誌 HISPÁNICA について

- ・第 51 号掲載論文は査読の結果、言語・教育 6 本と文化 2 本の計 8 本を承認。
- ・投稿規定の和文と西文の統一については、後日田尻理事からメールで報告する。

4) 奨励賞について

- ・本年度は 1 名（田林洋一会員）の申請があり、編集委員会の審査を経て、授与を決
定。
- ・第 2 回奨励賞授与は本年度総会で行う。
- ・賞状の準備は編集委員長田尻理事、金一封（5 万円）の準備は会計委員宮本理事が
担当。

5) 会報、HP について

- ・竹村理事より 10 月初旬に第 12 号、本年度中に第 13 号を発行予定との報告。
- ・高橋会長より、7 月 7 日バリで開催された Asociación Internacional de Hispanistas
の II Encuentro de Presidentes de Asociaciones Nacionales de Hispanistas の
報告。
機関誌 HISPÁNICA の論文タイトルのスペイン語訳を HP に掲載することが提案
され、現存冊子の裏表紙に西文で印刷されているものを利用する。HP への掲載作
業はガリレオへ委託せず、高橋会長が学生アルバイトを頼んで行う。

6) 会計報告案について

- ・昨年度大会の弁償金は、別項目を作成せず雑費で処理することを確認。

7) 2008 年度予算案について

- ・前年度繰越金を加味した形式に変更して、宮本理事が作成、メール審議に諮る。
- ・理事選挙等、該当年度に予定される項目は随時設けることを確認。

8) 次回理事選挙について

- ・次回理事会に諮る。

9) 2007 年度総会議案について

- ・総会プログラムは高橋会長が作成して、メール審議に諮る。
- ・2008 年度大会開催は長崎外国語大学へ打診中である。

10) その他

- ・片倉理事より分科会設立の提案。継続審議。

メールによる臨時理事会審議議事録

(2007 年度第 1 回理事会後、2007 年 9 月 20 日現在)

【審議事項】

1. 会員異動

- (1) 13 名の入会希望者、1 社の賛助会員の入会承認。
- (2) 8 名の退会希望者を了解。
- (3) 会費請求と未納会員の扱いについて
 - ・6 月 8 日、ガリレオより 2007 年度の会費請求を行った。
 - ・会費を 3 年間滞納し、会則第 6 条 2 項に該当する会員については、次のように処理する。

①ガリレオより督促状を送るとともに、継続の意思がなければ退会届を出すよう求める。

②意思表示がなければ除名する。また宛先不明の会員は①をふまず除名する。

2. 第 53 回 (2007 年度) 大会について

- ・6 月初旬に大会案内をガリレオより発送した。

3. 日本放送協会との会見について

- ・5 月 24 日、NHK ラジオ外国語講座関連 13 学会の各代表者と日本放送協会会長が会見した。

メールによる臨時理事会審議議事録

(2007 年度第 2 回理事会後、2007 年 10 月 25 日現在)

【報告事項】

- ・高橋会長より、7 月 7 日パリで開催された第 2 回各国イスパニヤ学会会長会議の報告があり、各国学会ホームページの Web ring 構築のため、本学会ホームページのさらなるスペイン語化、とりわけ機関誌 HISPÁNICA 掲載論文のスペイン語タイトルの準備が

急がれることが指摘された。

【審議事項】

1. 会員異動

3名の入会希望者を承認。12名の退会者希望者を了解。

2. 第53回（2007年度）大会について

- ・大会プログラムの修正版を発送する。
- ・総会議長は、斉藤文子会員（東京大学）に依頼し承諾された。
- ・総会次第が承認され、奨励賞授与式は総会終了後に行うことを確認。
- ・他学会が本大会会場でチラシを配布することは、信頼のおける学会であり、搬入、設営、残部処理等を当事者が責任を持って行う限り承認することを確認。

3. 会報について

- ・9月30日付で第12号500部を発行、ガリレオより発送した。
- ・寄稿者には各5部を進呈。

4. 会計について

- ・2008年度会計案は、前年度繰越金を加味したものを宮本理事が提案し承認された。

【会員の移動】

入会 正会員（29名）

鈴木友仁、頼田早季子、Guedea Rogelio、安達直樹、駒井睦子、柳田玲奈、松本有希子、Asiain Córdova, Aurelio、長野太郎、小柳美知子、中江萌、Trenado Deán, Paloma、Merrill, Sandra、Arrieta Domínguez, Daniel、寸田知恵、田邊まどか、小川佳章、小阪知弘、齊藤明美、丸田千花子、亀野邁夫、松田侑子、Barrientos Rodriguez, John David、Sueyoshi Ana、Isabel Gala Carlos、浮島孝子、浦眞佐子、Colmena Romero, Roberto、Vega González, Arturo
賛助会員（2社）

株式会社スパニッシュコミュニケーションズ、株式会社南雲堂フェニックス

退会 正会員（12名）

Tápiz, José María、Maria Luisa López、大岩勉、Ayucar, Enrique R.、米田富彦、Vicario、José Ignacio、山崎眞次、福本久美子、西川理香、志賀一朗、日笠真理子、出口厚実

滞納除名 正会員（10名）

Rodao, Florentino、Cravioto, Graciela、澤銀治、三浦麻衣子、Navarro Polo, L. Sergio、Benavides Pérez, Glenn I.、岸大介、高山秀幸、Ochando Brun, Francisco、富田広樹

賛助会員（1名）

Z. D. Institute

訃報

西山要、長南実、石田佳代

衷心より哀悼の意を表します。

メールによる臨時理事会審議議事録

(2007 年度第 3 回理事会後、2008 年 4 月 22 日現在)

【報告事項】

1. 第 54 回 (2008 年度) 大会：
11 月 12 日付で長崎外国語大学より、2008 年 10 月 11 日 (土)、12 日 (日) の日程で開催を受諾する旨の正式な回答があった。学会 HP にも案内を掲載する。
2. NHK 外国語ラジオ講座：
ラジオ講座の時間削減に対する再考を求める要望書を提出した関連 13 学会のまとめ役である松浦純日本独文学会会長より、3 月 31 日報告があった。
本年度から「まいにちスペイン語」15 分×週 5 回と「アンコールスペイン語講座 (I)」20 分×週 6 回の計週 270 分になり、従来の週 240 分と比べ 30 分の増加になった。

【審議事項】

1. 議事録修正
2007 年度第 2 回理事会議事録：
大会開催費用の学会拠出金に関する「30 万円」を削除することが確認された。
2. 会員異動
(1) 以下の入会希望者を全員承認 (入会申込み月順)
浦眞佐子、COLMENA ROMERO, ROBERTO、VEGA GONZÁLEZ, ARTURO、
岡村 VICTOR 勇、森川香織、DE ESTEBAN, BAQUEDANO
(2) 以下の退会者を全員了解 (依頼月順)
福井千春、浦和幹男、ARBELLA, PEDRO M.、牧山裕信、中嶋藤一郎、
河上志貴子、辻光博
3. 機関誌 HISPÁNICA について
・ 12 月 25 日付で第 51 号 600 部を発行、弘学社より発送した。
・ 投稿規定の投稿部門に言語教育を追加し、「言語、言語教育、文学、文化」とした。
・ 投稿規定の和文と西文の若干の齟齬を修正し、HP 掲載文と併せて統一した。
4. 封筒追加作成について
・ 学会封筒長 3 サイズは一年余りで 2000 枚を使用し在庫が少なくなったため、3000 枚を発注することが承認された。
5. 理事・監査選挙について
・ 2 月 1 日、選挙資料一式 410 通をガリレオより発送した。
・ 選挙結果は次のとおりとなった。
東日本 理事 (有効投票数 74) : 上田博人 (17)、江藤一郎 (13)、本田誠二 (13)、
小林一宏 (12)
次点 : 上野勝広 (11)
監査 (有効投票数 72) : 阿部三男 (5)、木村琢也 (5)
西日本 理事 (有効投票数 65) : 福嶋教隆 (22)、坂東省次 (20)、
長谷川信弥 (10)、平田渡 (10)
次点 : 有本紀明 (9)
監査 (有効投票数 65) : 坂東省次 (6)、秦隆昌 (4)、蔵本邦夫 (4)

- ・理事と監査の双方に選出された場合は理事を優先し、坂東省次会員は理事に選出された。
- ・同票の場合は選挙委員会が抽選し、東日本監査は阿部三男会員、西日本監査は秦隆昌会員が選出された。
- ・3月6日、選出された10名に就任依頼通知と承諾書を発送した。
- ・東日本理事： 小林一宏会員の辞退により、上野勝広会員が選出された。
- ・西日本監査： 秦隆昌会員の辞退により、蔵本邦夫会員が選出された。
- ・全員の就任依頼承諾を得て、会長選挙の手続きに入った。

6. 会報について

竹村理事より、次番号 13 号は4月下旬以降の発行を予定し、準備を進めている旨の報告があった。

7. 会計について

ガリレオより3月31日現在の口座残高の報告があった。

みずほ銀行	611,453 円
郵便局振替口座	6,875,465 円
合 計	7,486,918 円

以上

日本イスパニヤ学会 2006 度会計報告

(2006 年 4 月 1 日～2007 年 3 月 31 日)

収入

(単位：円)

科目	予算額	決算額	収支	備考
会費	2,800,000	3,572,500	772,500	
正会員		2,880,000		
海外在住会員		36,000		
賛助会員		180,000		
購読会員		31,500		
過年度会費		427,000		
前受会費		18,000		
寄付	0	8,000	8,000	
銀行口座利子	0	638	638	
グラシアン賞 副賞	0	500,000	500,000	
当期収入合計	2,800,000	4,081,138	1,281,138	
前期繰越金	5,419,352	5,419,352	0	
収 入 合 計	8,219,352	9,500,490	1,281,138	

支出

学会誌・会報発行経費	1,000,000	1,067,580	67,580	
52 回大会開催費用	300,000	430,520	130,520	
会場校関係		285,670		会報 12 号を参照(注)
大会案内発送費用		50,310		
プログラム印刷・発送費用		94,540		
事務委託費	1,150,000	960,235	-189,765	
会議開催費用	60,000	44,305	-15,695	
庶務委員経費	60,000	60,000	0	
通信・交通費	250,000	210,462	-39,538	
学会奨励賞	150,000		-150,000	
その他	150,000	125,749	-24,251	
銀行手数料		24,577		
雑費		101,172		
当期支出合計	3,120,000	2,898,851	-221,149	
収支差額(次年度繰越)	5,099,352	6,601,639	1,502,287	
支 出 合 計	8,219,352	9,500,490	1,281,138	

(注)「会場校関係」は、開催費用 300,000 円に残金 14,330 円の返金を加味しています

会計委員 宮本正美

監査の結果、異常なきものと認めます。

2007 年 10 月 20 日

会計監査 寺崎英樹

2007 年 10 月 20 日

会計監査 立林良一

2006 年度期末残高内訳	
みずほ銀行普通預金	583,141
郵便局振替口座	5,914,265
三井住友銀行普通預金	104,233
計	6,601,639

日本イスパニヤ学会 2008 年度会計案

(2008 年 4 月 1 日～2009 年 3 月 31 日)

収入

(単位：円)

科目	2006 年度決算	2008 年度案	収支	備考
会費	3,572,500	3,120,000	-452,500	8000 円×390 名
正会員	2,880,000			
海外在住会員	36,000			
賛助会員	180,000			
購読会員	31,500			
過年度会費	427,000			
前受会費	18,000	0	-8,000	
寄付	8,000	0	-638	
銀行口座利子	638	0	-500,000	
グラシアン賞 副賞	500,000			
当期収入合計	4,081,138	3,120,000	-961,138	
前期繰越金(※)	5,419,352	6,621,639	1,202,287	
収 入 合 計	9,500,490	9,741,639	241,149	

支出

学会誌・会報発行経費	1,067,580	1,100,000	32,420	
大会開催費用	430,520	450,000	19,480	
事務委託費	960,235	980,000	19,765	
会議(理事会等)開催費用	44,305	60,000	15,695	
庶務委員経費	60,000	60,000	0	
通信・交通費	210,462	220,000	9,538	
学会奨励賞	0	150,000	150,000	
理事改選費用	0	120,000	120,000	
その他	125,749	100,000	-25,749	
銀行手数料	24,577			
前年度分経費	0			
雑費	101,172			
当期支出合計	2,898,851	3,240,000	341,149	
収支差額(次年度繰越)	6,601,639	6,501,639	-100,000	
支 出 合 計	9,500,490	9,741,639	241,149	

※2008 年度の前期繰越金は、2006 年度の次期繰越金に 2007 年度の会計案を加味した金額です

作成

会計委員 宮本正美

日本イスパニヤ学会 第53回 年度大会 会計報告（会場校関係）

【収入】

（単位：円）

大会開催費用予算	¥0
懇親会参加費（5,000×100名）	¥500,000
協賛金（書籍展示をした書店・出版社から）	¥90,000
収入計	¥590,000

（弘学社よりワイン12本寄贈）

【支出】

大会運営アルバイト謝礼	¥55,460
理事会昼食代	¥16,800
大会運営者食事	¥16,852
大会参加者・運営者茶菓等	¥18,903
懇親会費（5,000×70名）	¥350,000
振込み手数料	¥840
切手代	¥540
支出計	¥459,395

収支差額	¥130,605
------	----------

【書評】

柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』

（エディマン／新宿書房、2007年）

野谷 文昭（東京大学）

ラテンアメリカ主義というタームを日本では加茂雄三のような歴史研究者が、確か1970年代頃に盛んに使い出したという記憶がある。加茂の場合、シモン・ボリーバルの統合思想をその先駆と見なし、根底に反米主義を孕むそれをボリーバル主義と呼んでいる。国際関係論や国際社会学の専門家を集めての研究会に首を突っ込んでいた頃、評者もラテンアメリカの統合運動について書くことを求められ、アブラヤマリアテギを素材にしながら論文を書いたことがある。また、当時日本で刊行された、ヨーロッパの1920年代や1930年代の文化および思想について論じたいくつかの著作に刺激を受け、ラテンアメリカの作家たちの動向に共通する要素として認められる、地域ナショナリズムとしてのラテンアメリカ主義について考察したこともある。もちろんそこでも反米主義や精神主義は必須の要素として欠くことができない。本書を読みながら、絶えず既視感に襲われたのは、評者にそうした作業の経験があるからだろう。

本書の著者の柳原氏はプロログで、カルペンティエールの描くニューヨークとホセ・マルティの描く同じ都市をだぶらせ、まずそこに反ニューヨークの言説を見出す。さらにそれを反合衆国、汎ラテンアメリカの言説へと拡大することにより、ラテンアメリカ主義の言説について概念を抽出する。そして主に文学的テキストを通じて、この言説が生成されるプロセスの叙述を試みる。したがって、そのスケールは大きく、脇道にも果敢に踏み込んでいく。たとえば同時代のヨーロッパを語った部分などがその脇道であり、このような

迂回を含む大胆な構成は下手をすれば空中分解を招きかねないのだが、それでも最後まで読ませるのは、文献目録に見られる豊富な資料とぶれない見通しが本書を支えているからだろう。

しかし、逆に言えば、最初に見通しすなわち言説の存在という一見自明とも思える仮説があり、それを繰り返し語ることにならざるをえない。そのため、構造はガルシア＝マルケスの『族長の秋』を思わせる螺旋状となり、読者は何度も振り出しに戻らされることにもなる。これをジーン・フランコの『ラテンアメリカ——文化と文学』と比べてみよう。フランコの著書の場合には、個別に書かれた章を繋ぎ合わせてはいるが、各章が時代の特徴を叙述していてそれを歴史という時間軸が貫く形になっている。そのため叙述は確実に進展する。一方、柳原氏の著書は、個々の章に時間軸が存在するものの、各章の間には可逆性がある。ドライブする力がそれほど感じられないのはそのためだ。しかし、これは著者が敢えて選択した戦略なのだろう。各章の終わりがいわば踊り場となっていて、読者は先を急ぐ前に、そこで休憩しつつ今読んだ内容を反芻できる。これはひとつのメリットである。また、そうでなければ消化不良になってしまう。過多と言えるほど情報が詰まっているからだ。

ところで、評者は冒頭で自らの体験について触れたが、当時自分が書こうとしたことと本書が目指すところには大きな違いがある。それは著者が言説分析など、思想の分野の方法を応用していることである。第5章として収められ本書の核を成すアルフォンソ・レイェス論を、かつて単独の論文として読んだことがあるが、そのときに感じたのは、新たな方法を持ち込んでスペイン語圏の文学を素材に論じる世代が現れたことに対する新鮮な驚きだった。著者は以後も一貫してその方法を使い続けてきた。それが本書に結実したわけで、成果として大いに評価できる。ただし、全体として見た場合、前身となる博士論文に訂正加筆したものであるとはいえ、各章の密度にばらつきがある。しかし、それは欠点というより、各章が個別に発展する可能性を孕んでいるということの証左でもある。著者の今後の仕事に期待したい。

【書評】

バーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』

(和田光弘・森丈夫訳、名古屋大学出版会、2007年)

Studnicki-Gizbert, Daviken, *A nation upon the Ocean Sea: Portugal's Atlantic diaspora and the crisis of the Spanish Empire, 1492-1640*, New York: Oxford University Press, 2007.

網野 徹哉 (東京大学)

私はまだ大西洋のことをよく知らない。だがそれが、学問的探究にとって、とても豊かな可能性を蔵した空間であるということはわかっている。とりわけ、最近手にした二冊の書物を繙くにつれて、この気持ちは強まってきた。

『アトランティック・ヒストリー』は、北米史研究の泰斗バーナード・ベイリンが、「大西洋史」という、古そうでいて、実は新しく、しかも近年最も注目されている一つのジャンルの全貌とその深みを簡潔に提示した書物である。和田光弘、そして森丈夫という二人の最適の訳者を得て、わかりやすい日本語と充実した解説とともに私たちに届けられた。

15世紀末以降の旧世界と新世界の歴史が不即不離の関係にあることについては、ここであえて述べなくてもよいだろう。だが、この二つの世界の間に横たわる「海」については、

これまでは、どちらかといえば、動きゆく旅人たちやモノの前に、厳然とたちはだかる障壁、といったイメージによって扱われてはこなかったか。この海が、さまざまな世界を結びつけ、新しい価値を生み出す、いわば溶鉱炉のような熱い空間であったとは、あまり考えられてはこなかったように思われる。

しかしペイリンは、大西洋を、近世以降、地球の半分にもまたがって創生したひとつの「共同体」として、また諸大陸の人々と環境を包摂する、生きた空間としてとらえる。そしてその時に見えてくる、多様な関係の束の在処を、経済のみならず、宗教や思想などのさまざまな領域における諸例を通じて鮮やかに示してくれている。本書は、これから大西洋世界への学的旅を取行しようとする者にとって、不可欠な海図となるであろう。

しかしいっぽう、この書物は、大西洋史に向かう時には、二つのことを肝に銘じなければいけない、と私たちにうながしている。一つは、この歴史を「国家の歴史」とその海外拡張の歴史として見てはいけない、ということ。スペインやポルトガル、オランダ・・・といった「国家によってつくられた歴史」としては考えてはいけないということだ。もう一つは、この海をめぐって生み出された公的・国家的な制度は、けっして現実を反映してはいないということである。スペイン国家やインディアス商務館による移民や物流の統制システム、あるいは官僚制度の歴史に慣れ親しむ従来の歴史家は、まず脳裏のフィルターを外すことが要請されるのだ。

だが、ひとたび曇りなき目で、この海を眺めることができるようになると、諸大陸の人々と環境を包摂する生きた空間大西洋が、潤いを帯びた表情とともに歴史家に微笑みはじめる。ペイリンの書物と同じ頃に手に取った、Studnicki-Gizbert の研究は、この微笑みを見事にとらえた、私が久しぶりに出会えた快著であった。

16世紀後半頃から、ラテンアメリカ植民地の各地において、ある集団が示す、活き活きとした商業的躍動が顕著に感じられるようになっていく。彼らは「ポルトガルのナシオン」に属するとされた人々であった。1492年、あの忌まわしき追放令によってスペインから引き剥がされたユダヤ教徒たちの多くが、隣国ポルトガルに避難先を求めたことはよく知られているが、この人々は、新天地においても、国家による強制改宗政策の犠牲となり、結果として多くの改宗ユダヤ教徒、コンベルソが発生する。しかし彼らは、商業国家ポルトガルに包摂されるとともに力強い商人集団として立ち上がり、やがて大西洋世界へと向かうようになる。

大西洋には、「インディアス海路」という、厳重に警護された船団システムが粛々と往還し、スペイン国家の独占体制の下にあるヒトとモノの流れを統制するシステムが存在した。ポルトガルのナシオンの人々は、このシステムの隙間をかいくぐるようにして、スペインの植民地世界に少しずつ浸潤していく。とりわけ1580年、ポルトガルがスペインに併合され、両国の境界がぼやけるや、彼らはラテンアメリカ各地に一举に勇躍し、スペイン帝国内部のモノの流れをすっかり我がものに改編してしまったのだ。

それ以降17世紀の前半まで、大西洋を取り囲むアフリカ、アメリカ、ヨーロッパの陸塊に飛散し、海上を漂うたくさんの船舶の上で生を営むポルトガルのナシオンの人々によって、この海は、あたかも、もう一つの地中海となった。親族・友人関係、そして彼らが固執する父祖伝来の「宗教」を軸に、たくさんの拠点ハブを結びつけながら、柔軟性に富む独自のネットワークを作り出したナシオンの人々は、アメリカの銀、アフリカの黒人、ヨーロッパの毛織物、そしてアジアの絹などの多様な商品を、このネットワークに流し込んでいった。若き歴史家 Studnicki-Gizbert は、統制システムの目の届かないようなところに張り巡らされたネットワークの具体的なかたちを、膨大な原史料を駆使して明らかにし、躍動するナシオンの世界を実証した。迫力と繊細さに満ちた彼の歴史叙述を、是非原

著にあたって、堪能していただきたいと思う。国家的な枠組みを取り払い、そして海をめぐる制度と現実を区別しなければいけない、というペイリンの呼びかけにも、見事にこたえた書物である。

だがしかし、ポルトガルのナシオンによって大西洋が活き活きと輝いたのは、実はわずか数十年のことでしかなかった。独占的システムを守ろうとする旧キリスト教徒たちは、このナシオンの躍動を「ユダヤ人による陰謀」という、いつもの陳腐なイデオロギーを駆動させて抑圧した。その時、彼らは、とっておきの秘密兵器、異端審問を動かすのである。1630～40年にかけて、リマやメキシコに拠点を立てて大西洋を牛耳っていたユダヤ系の商人たちは、同地の異端審問所の厳しい弾圧により壊滅させられる。多くの商人たちが、隠れユダヤ教徒の嫌疑をかけられて、炎の中でその命を失った。

Studnicki-Gizbert は、16世紀から17世紀にかけての半世紀ほどのあいだに生まれ、成長し、そして死滅した、輝かしい海の共同体の姿を、初めてはっきりと、私たちに示してくれた。彼の書物によって、大西洋がもつ知の可能性は、ますます明らかになったと言える。

この海の世界の史的探索に、一生をかけてみるのも悪くはないな、と思わせるような魅力あふれる二冊の書物であった。

【書評】

稀代のスペイン文学者の最終メッセージ

——長南実訳『オルメードの騎士』（岩波書店、2007年）の書評に代えて

稲本 健二（同志社大学）

あの戯曲の「リズム感を日本語に移すことはできないものだろうか」。人生の最後まで悩み苦しんだ学者が、人知れず完成させていた翻訳原稿を、最後の弟子が世に出す労をとった。何と羨ましくも美しい話であろうか。何気ないようにして、ひっそりと、ロペ・デ・ベガの『オルメードの騎士』は岩波文庫の一冊として出版された。今、頂いた献本を撫でるようにして見つめながら、この文章を書いている。万感の思いが交錯する中で、驚くことが多々あった。弟子から「稀代の」と評された訳者が選んだスタイルは、向こう見ずとも言えるほど大胆な《韻文訳》だった。その果敢に挑戦する姿勢に、長南実という根性の据わったスペイン文学者を日本イスパニヤ学会の重鎮として戴いていたことを、改めて会員全員と共に我らの誇りとしたい。今はまずお礼を言うべき時だと思う。

さぞやご苦労の連続だったに違いない。それは解説を添えられた福井千春氏も同様だったはずだ。「訳文にはなるべく手を入れないという大原則」のもとで、意を尽くせなかったところも多々あったことであろう。注釈に異なる文体が見え隠れするのも、そういう意味で致し方ないことなのである。無論、長南実氏の業績はこの韻文訳にではなくて、これまでの他の、しかしとてつもなく画期的な、労作に求められるべきものであろう。まだまとめた校訂版さえなかった頃に、ラス＝カサス神父の『インディアス史』を日本語に移された。他言語への翻訳としては世界初の快挙であった。弟子の仕事にも心配りを怠らず、誤訳を見つけるとそれを自ら訳し直して、さりげなく訂正されたこともあった。それどころか、『スペイン中世・黄金世紀文学選集』（全七巻、国書刊行会）をまだ企画段階で一番弟子にあたる牛島信明氏が思い詰めておられた時に、「次期尚早だ」と諫められたにもかかわらず、その後の進展を温かく見守られたのも氏ならではの逸話であろう。

さて、この韻文訳の不備をあげつらうのは容易だ。しかし今はそうすべき場所ではない

し、する必要もない。独白の多い『オルメードの騎士』という戯曲だからこそ、韻文訳が活かされているところは多い。とは言え、韻律論的な誤謬があるにはある。誤訳を指摘しうる者も出てくることだろう。注釈が一樣ではなくて、玉石混淆だと映るかも知れない。スペイン黄金世紀の文学を語る上で常識となっている点が等閑視されているところもある。畢竟、新たな翻訳が必要だったのかとさえ自問したくなる瞬間がないとは言いきれない。解説にみる『セレスティーナ』へ偏りすぎた解釈を勇み足と見ることもできるだろうし、どうも悲劇というジャンルを理解していない様にも見受けるし、ロペ・デ・ベガの生涯に関するデータの扱いに恣意的な態度が伺えることも否定できない。しかしながら、そういう不備が見えてきた者には、昨年の年始めに他界された長南先生がにこやかな微笑みを浮かべて仰る言葉が聞こえてきたはずだ。「だから後は任せたまえ」と言う声が。

本書はそういう訳者からの最終メッセージである。その点を噛みしめるようにして味わって頂きたい。だからこそ、今はただ、遅ればせながら、ご冥福をお祈りすると共に、心から感謝の言葉をお贈りしたいと思う。合掌。そして、ありがとうございました。

【書評】

ジュアノット・マルトゥレイ、マルティ・ジュアン・ダ・ガルバ
『完訳 ティラン・ロ・ブラン』（田澤耕訳、岩波書店、2007年）

三倉 康博（中央大学非常勤講師）

カタルーニャ語文学を代表する古典である『ティラン・ロ・ブラン』（*Tirant lo Blanc*、初版 1490 年）の、原典からの全訳が出版された。訳注・解説を含めると、二段組で 1000 ページを超える大部の書である。現代におけるこの作品の再評価に道を開いたマリオ・バルガス＝リョサによる、「日本語版への序文」（鼓直訳）も付されている。

『ティラン・ロ・ブラン』は、ブルターニュ生まれの騎士ティラン・ロ・ブランを主人公とする騎士道物語である。物語はイングランドで幕を開けるが、その後間もなく地中海に舞台は移動し、そこが主人公ティランの最大の活躍場所となる。帝都コンスタンティノープルに押し寄せるイスラーム勢力の脅威からギリシャ帝国（ビザンツ帝国）を解放するための壮絶な戦いと、ギリシャ皇女カルマジーナとの情熱的な恋、この二つが波乱万丈の物語の軸となる。ティランは様々な困難を乗り越えて——そこには北アフリカの征服とキリスト教化という壮大な幕間劇も含まれる——帝国を解放する。その功績により、帝位継承者（カエサル）の位を与えられるとともに、愛する皇女との婚約を認められ、幸福と栄華の頂点に達した彼は、さらに帝国の旧領をも回復してゆくが、物語は最後に大きな暗転を用意している。

際立った非日常性を特色とする幾多の騎士道物語と比較して、『ティラン・ロ・ブラン』がきわめて現実的、写実的であるということが、しばしば指摘される。訳者が「解説」で紹介している碩学マルティ・ダ・リケーの分類では、旧来の騎士道物語が「騎士道本」と呼ばれるべきものであるのに対し、『ティラン』はそれを乗り越える「騎士道小説」という（pp. 1004-1005）。じっさい、『ティラン』は実在の土地を舞台としており、魔法や妖術といった超自然的な要素は排除されている。この作品の中では、王侯貴族も庶民も、英雄も悪漢も、キリスト教徒もムスリムも、男も女も、そして彼らが繰り広げる戦争も愛も、人間的な日常性の中で活写されている。

とりわけ登場人物の性格や内面は、類型化や抽象化を逃れ、リアリティを持った複雑さとともに描かれている。訳者も「解説」の中で強調している（pp. 1006-1008）、こうした

人物造形の奥深さは、時間と空間の隔たりを越えて『ティラン』が読者をひきつける、重要な要因の一つであろう。私が中でも強い印象を受けたのは、コンスタンティノーブルの宮廷で繰り広げられる、ティランとカルマジーナの、そしてそれ以外の男女の、恋愛模様の描写である。心理の機微を見事にとらえた筆致には、近代の精緻な心理小説を読んでいるような錯覚を覚えた。

だが現実性や日常性に根ざす一方で、『ティラン』が雄渾な想像力の産物であり、途方もない物語性を備えているということも、また確かである。一つ一つの事件や戦いの描写は現実的であっても、それらが積み重なっていくうちに、一人の英雄の超人的、驚異的な活躍の物語が、読者の前に立ち現れるだろう。そもそも 500 年以上のときを経た現代、他の幾多の騎士道物語と『ティラン』を読み比べようとする読者は限られているのではないだろうか。そうした比較や文学史的評価といったことを意識することなく『ティラン』を読めば、何よりもまず、その際立った物語性によって魅了されるかもしれない。しかしそれはそれで、一つの読み方、楽しみ方であろう。

いずれにせよ、長大かつ複雑な『ティラン・ロ・ブラン』の魅力を限られた字数で語りつくすことは不可能である。この騎士道物語は、バルガス＝リョサが「日本語版への序文」の中で指摘するように、「あらゆる視点から接近することが可能」(p. iv) な作品であり、読み手の一人一人に応じて、あるいは読み返すたびごとに、異なる相貌を示すに違いない。その意味で、文学的再評価が進むこの大作を日本語で——しかも、古典の雰囲気を保ちつつも読みやすい日本語で——読むことができるようになったのは、まことに喜ばしい。本書が数多くの読者を獲得することを期待したい。

【書評】

アルトゥロ・ラモネダ編著『ロルカと二七年世代の詩人たち』

(鼓直・細野豊 編訳、土曜美術社出版販売、2007 年)

坂田 幸子(慶應義塾大学)

本書は Castalia didáctica シリーズから 1990 年に出版された *Antología poética de la generación del 27* の翻訳である。編者のアルトゥロ・ラモネダはアンソロジーの名手で、作品選定にあたってのセンスとバランス感覚の良さが感じられる。また、27 年世代を文学的文脈のなかに位置づけて解説した序論は、簡潔ながら読みごたえがある。これらの詩人たちは、20 世紀のヨーロッパ詩における重要性にもかかわらず、我が国では一部を除いてこれまでほとんど紹介されてこなかった。27 年世代の詩人たちをまとめた形で日本に紹介する試みとしてラモネダのアンソロジーを選んだのはまことに的確な判断だったと言える。編者の鼓直氏と細野豊氏をはじめとする総勢 9 名の研究者によって成されたこの翻訳は、ひろく現代詩の愛読者や研究者にとって待望の福音ではないだろうか。

本書の内容をかいつままで紹介すると、まず、ラモネダによる〈序論〉。それに続いて 10 人の詩人たち——P. Salinas, J. Guillén, G. Diego, F. García Lorca, V. Aleixandre, D. Alonso, E. Prados, R. Alberti, L. Cernuda, M. Altolaguirre (掲載順)——の詞華集。これがもちろん本書の中核を成している。その後には〈資料〉の項目で、これは主として詩人たち自身による回想や評論の抜粋。最後に〈詩人紹介〉(原著では詩人ごとに掲載されていた略歴が、翻訳においては巻末にまとめられた)。なお原著には、高校や大学での学習の便宜を図るため、年表や鑑賞の手引きなども付されているが、これらは翻訳にあたって割愛された。注も原注のままではなく、省略あるいは変更、加筆

がある。ひとつ疑問に思うのは、原著にはそれぞれの詩の出典である詩集のタイトルが載っているのに、翻訳では何故それを省略したのかということだ。出典が分かれば、＜詩人紹介＞と照らし合わせることによってその詩が書かれた時期や状況について見当がつき、それは詩のより深い理解の助けにもなろう。27 年世代は 20 世紀スペインの歴史に翻弄された人々であり、この本に収められた詩のうちのいくつかは、書かれた時代や社会背景と切り離せない緊密な関係があるだけに、なおさらだ。

いずれにせよ、27 年世代の選りすぐりの詩を、作品の息遣いを伝える行き届いた訳文で読めるようになったのは有り難い。優れた訳詩は、その詩の秘められた意味や新たな魅力にも目を開かせてくれる。なかには相当難解な作品もあり、困難にもかかわらず訳し遂げられた訳者の方たちに心から敬意と謝意を表したい。ただ、訳者の方によっては、あまりに恣意的な訳や明らかな誤訳が散見されるのは、惜しまれる。なお、本書の＜序論＞でスペイン前衛詩の先駆として述べられているラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの超短詩グレグリーアについては、2007 年に平田渡氏による翻訳『グレグリーア抄』（関西大学出版部）が出版されたことも付け加えておこう。ラモン独自のユーモアや意表をつく表現を軽妙洒脱な訳によって味わうことができる。

【自書紹介】

Viajeros （東京大学教養学部スペイン語部会編、東京大学出版会、2008 年）

斎藤 文子（東京大学）

本書は、スペイン語の基礎的な文法をひととおり終えた学習者のための、講読用教科書である。

スペイン語学習者の数は年々増加しており、国内に 10 万人以上いると言われる。この数字を考えたとき、日本におけるスペイン語教材の出版状況は偏っていると言わざるをえない。初級文法の教科書は毎年何冊も新しいものが出版される一方で、中級レベル以上の教材の数はきわめて限られている。いまやインターネットのおかげで、スペイン語の新聞を読んだり、ニュースを聞いたり、本を購入することは簡単にできるようになったが、初級文法を終えた段階でいきなりこれらの生のスペイン語に取り組みうとすると、ハードルがかなり高い。文法を習っただけでは、そのあと適切なフォローがないかぎり、せっかく大学で 1 年かけて育まれたスペイン語への関心は雲散霧消してしまう。

一方大学の外には、スペイン語圏に出張・長期滞在した経験のある人たち、スペイン語圏文化に対する興味・あこがれを抱く旅行者、独学者など、幅広い層のスペイン語学習者が存在する。こうした学習者はおそらく単なる文法学習以上の教材を求めているはずだ。彼らの広範な関心にある程度応えつつ、適切な注と解説のついた、教養的なスペイン語の読み物のアンソロジーが必要とされているのではないか。

東京大学教養学部スペイン語部会では、この数年間、主に初級のスペイン語学習者を念頭において、ウェブ上のホームページ(<http://spanish.ecc.u-tokyo.ac.jp/>)を活用したスペイン語教育の開発に取り組んできたが、上に述べたような文法を終えた後の教材の必要性を痛切に感じ、本書を編集することとなった。今年 3 月下旬に刊行されたが、出版社からのデータによれば、書店での売れ行きは悪くなく、一般読者の需要が少なくないことが確認された。

本書を編集するにあたって、文学作品だけでなく、なるべく多様な文章を集めたアンソロジーになるよう心がけた。さいわい東京大学教養学部でスペイン語教育に携わっている

／いた、非常勤講師も含めた教師たちは、それぞれ歴史学、文化人類学、政治学、言語学、文学、文化研究などの多岐にわたる専門分野に軸足を置きながら、語学教育にかかわっている。20名の方に、各人の得意分野で、テキストを執筆、または選定してもらうよう依頼した。その結果、全部で27篇の多彩なテキストが集まった。

その一部を紹介してみよう。インカ帝国滅亡がインディオ社会に与えた影響、海賊によるアステカの財宝強奪、18世紀に地球の形状を決める探索が新大陸で繰り広げられたという科学的エピソード、メキシコの地酒プルケについて、ピカソ、ガウディ、アルモドバルについて、のような興味深い題材の文章、またヒメネス、ネルーダ、ボルヘスの詩、サルサとボレロの代表作の歌詞、アルゲダスの『深い川』、ボリバルの『ジャマイカ書簡』、オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』、ロペ・デ・ベガの『ペリパニェスとオカーニャの領主』、『平家物語』の響き高い現代スペイン語訳など、古典的な作品の抜粋もならぶ。本書の多様さはおわかりいただけると思う。それぞれのテキストに、そのテーマに精通した担当者が解説と注を付けている。言語学者がイルカの言語について執筆しているなど、意外な組み合わせに驚かれる学会会員もいらっしゃるかもしれない。1篇の本文は、およそ3～4頁程度、注の頁と見開きになっている。またテキストを朗読したCDが2枚付いている。現在私たちが展開しているホームページとも将来はリンクさせて、紙の教科書の世界にとどまらない、立体的な教育を開発していきたいと考えている。

多彩な文章が集まっているということは、なかにはクセのあるテキストもあるということだが、それはスペイン語の豊かな世界を反映していると考えていただきたい。文章の難易度のめやすを★印の数で示した。

本書の執筆者の多くは旅の達人である。この旅人たちが念入りに選んだテキストを通して、読者の方々にも、多様なスペイン語世界と出会う旅人になってもらいたいと願っている。

【新刊案内】

Ruiz Tinoco, Antonio (ed.), *Jornadas sobre métodos informáticos en el tratamiento de las lenguas ibéricas (1 y 2 de Julio, 2006)* : ACTAS, Centro de Estudios Hispánicos, Universidad Sofia, 2007

Ueda Hiroto, Antonio Ruiz Tinoco, *Claves del español para hablantes de japonés*, Madrid, Editorial SM, 2008.

網野徹哉『インカとスペイン 帝国の交錯』講談社、2008

オソリオ、マルタ『棒切れ木馬の騎士たち』(外村敬子訳)、行路社、2007

太田靖子『俳句とジャポニスム：メキシコ詩人タブラーダの場合』思文閣出版、2008

カストロ、アメリコ『セルバンテスへ向けて：「わがシッドの歌」から「ドン・キホーテ」へ』(本田誠二訳)、水声社、2008

カストロ、フィデル『少年フィデル』(柳原孝敦監訳)、トランスワールドジャパン、2007

カストロ、フィデル『チェ・ゲバラの記憶』(柳原孝敦監訳)、トランスワールドジャパン、2008

ガジェゴ・ガルシア、ラウラ『漂泊の王の伝説』(松下直弘訳)、偕成社、2008

片倉充造『ドン・キホーテ批評論』南雲堂フェニックス、2007

ガラ、アントニオ『さらば、アルハンブラ：深紅の手稿(上・下)』

(日比野和幸・野々山真輝帆・田中志保子他訳)、彩流社、2007

川成洋・坂東省次他編『スペイン内戦とガルシア・ロルカ』南雲堂フェニックス、2007

ゴーチエ、テオフィル『スペイン紀行』(桑原隆行訳)、法政大学出版局、2008

コルタサル、フリオ『愛しのグレンダ』(野谷文昭訳)、岩波書店、2008
 サンペドロ、ホセ・ルイス『エトルリアの微笑み』(渡辺マキ訳)、日本放送出版協会、2007
 芝修身『真説 レコンキスタ：〈イスラーム VS キリスト教〉史観をこえて』書肆心水、2007
 清水憲男『スペイン語表現集 落ち穂ひろいⅡ』上智大学イスパニア研究センター、2007
 ジュアノット・マルトゥレイ、マルティ・ジュアン・ダ・ガルバ『ティラン・ロ・ブラン』(田澤耕訳)、岩波書店、2007
 鈴木正士『「ドン・キホーテ」における創造世界』行路社、2008
 ソル・フアナ『知への賛歌：修道女フアナの手紙』(旦敬介訳)、光文社、2007
 東京大学教養学部スペイン語部会編『Viajeros』(東京大学スペイン語教材)、東京大学出版会、2008
 ピサロ・サンブラーノ、ミゲル『詩と演劇』(中岡省治・吉田秀太郎・堀内研二訳)、ミゲル・ピサロ作品集翻訳・出版会、2007
 ビラ＝マタス、エンリーケ『バトルビーと仲間たち』(木村榮一訳)、新潮社、2008
 ボルヘス、ホルヘ・ルイス『ブエノスアイレスの熱情：ホルヘ・ルイス・ボルヘス初期詩集成 1923-1929』(斎藤幸男)、水声社、2007
 リャマサーレス、フリオ『狼たちの月』(木村榮一訳)、ヴィレッジブックス、2007
 レイエス、アルフォンソ『アナワクの眺め (1519)』(柳原孝敦訳)、ヌエボレオン州立大学、2008
 レオン、シエサ・デ『インカ帝国地誌』(増田義郎訳)、岩波書店、2007
 『建築家ガウディ全語録』(鳥居徳敏編・訳・注解)、中央公論美術出版、2007
 「総特集 フィデル・カストロ」『現代思想 5月臨時増刊』青土社、2008
 「特集 オクタビオ・パス」『詩と思想 7月号』土曜美術社出版販売、2008
 「東谷穎人教授記念号」『神戸外大論叢』(57巻第7号)神戸市外国語大学研究会、2006

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。特に分野は問いません。下記のような項目など、スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

- ◇ 国内外の学会の案内と報告
- ◇ 国内の学術講演会・行事の案内と報告
- ◇ スペイン語圏に関する新刊書(和書・洋書)の紹介
- ◇ その他

(使用言語：日本語またはスペイン語)

(原稿分量：1000～1400字程度)

【編集後記】

『会報 13号』をお届けします。前号の出たのが昨年の9月末ですから、今度も1年近く間が空いてしまいました。私の理事の任期も、とうの昔に終わっています。刊行が遅れてしまったこと、深くお詫び申し上げます。そしてお忙しいなか、すばらしい原稿をお寄せくださった執筆者の皆さま、協力してくださった理事の方々、庶務委員の方々には心から感謝いたします(ことに「新刊案内」を作成するに当たっては、毎度、柳原孝敦理事のお力添えを得ていました)。

読み物として面白い『会報』をめざし、私なりに工夫をこらしたつもりです。今後の『会報』のさらなる充実を祈りつつ、次号の編集担当の方にバトンを渡します。(竹村文彦)